

ぼくのテレビ

有森信二

ぼくのテレビ貰ってくれませんか、という書き出しの、坂本からの手紙が届いたのは、坂本の葬儀が終わった翌日だった。

坂本が午後になっても出勤しないからと、係からアパ―トに連絡したところ、蒲団の中で冷たくなっているのを大家に発見されたのだった。原因の取調べや解剖などで手間取り、葬儀は死亡の四日後に、関係者の間で秘かに執り行われた。

私が、朝刊を取るときには見かけなかった薄緑色の封筒が、夕方郵便受けの一番上に置かれていた。死後五日目と見込んだのであろう日に、配達日が指定されていた。

黒の縁取りの中で、野球帽をあみだに被った、弾けそうな笑顔の写真を目に焼き付けてきたばかりであったから、坂本一郎という差出人の名前を見て驚いた。開封すると、見慣れた几帳面な字で、簡単な内容が書かれていた。

手紙は、死を間近にしたという内容にはほど遠く、中等の紙質の便箋からは、微かな花の香りさえ漂っていた。それにしても、坂本が何故、私あてに手紙を書いたのか。

私たちは、大部屋の端と端に机があり、普段とりたてて

口を交わすという間柄ではなかった。二十四歳の同年齢である二人の共通点は、同期の採用で、同じ総務部に配属されたということだった。総務部内での仕事の割り振りは、私が総務課所属で、坂本は人事課所属だった。仕事では殆ど交わることはなく、コピーのついでに「上手くいってるか」という程度のことを話すぐらいのものだった。

「ぼくのテレビ貰ってくれませんか。

物は新品同様です。最初のボーナスで買ったばかりなのですが、ご存じのように、ぼくの趣味は読書です。

もう一つはランニングで、近く開かれるハーフマラソンに出る予定です。タイムは度外視です。

一年間にテレビを見たのは、合わせて十日にもなりません。誰かにテレビを貰ってもらえたら、嬉しいのです。

決して、邪魔になるからではありません。一年間もほったらかしにしておくことが、正直、ぼくの性分に反するからです。必要とする人があり、有効に利用してもらえたら嬉しいのです」

どこか余所を向いたままの、ですます調で書かれた内容の横書きの手紙は、便箋の二枚目の上段までの分量で終わっていた。途中で投げ出したというのではなく、要件のみを簡潔に書くという気持の整理をした上で、したためられたものだろうと思えた。封筒も、彼の生活ぶりを思わせる

目立たない材質のものを用いていた。

私と坂本は、昨年の四月、他の部などに配属された四十人とともに採用された。二人が対面したのは、この日が初めてであり、同じ紺のスーツを着た五十人が大会議室で採用担当者から紹介され、後は当該部の上司がそれぞれを配属先に連れて行った。

残ったのが私と坂本だった。名前を聞いただけで、何となく気の合いそうな奴だと思った。

「とうとう始まったな」

「年貢の納め時だよな」

そんな会話をしたことを覚えている。新入職員紹介のリストによると、二人ともまずまずの部類に入る私大卒だった。私は一浪して入った法学部を卒業し、坂本は経済学部であるが、半期の休学のため卒業が一年遅れている。

二人が大会議室に残されたかたちになったのは、採用試験を担当するのが総務部であり、総務部長ほかの上司が、他の部への挨拶にいったん出向いたからだった。

私の学生時代は当初司法試験コースに所属していたが、早く社会に出て親元の面倒を見ねばならないという家の事情があり、志望を切り替え、就職に転じたのだった。

実際、父は三年前に卒中を患い、現在は降格の身分で、

市役所の課長代理として、定年までの六年という日々を、身を細めながら勤めている。母は母で、元々抱えていた心臓の不整脈が改善する兆しが見えないことから、「ありがとう。気を遣ってくれたんだね」と私の就職に詫びを言ってくれた。

私が司法試験を志しているということは知りながら、後に続く弟の進学も考えねばならない状況では、早く職に就いてくれたことを喜ぶほかないのだ、と分かっていた。

坂本は、学生時代は硬式野球で鳴らし、二年次のとき、神宮大会にも外野手として出場したという。守備と肩では一時実業団のスカウトの目にも止まるほどで、本人も野球就職を目標にしていたらしい。

しかし、三年次の春を迎えたばかりの朝、ランニングの途中、ハンドルをとられてよろけてきた新聞配達人のバイクに接触して転倒し、利き腕の右手を骨折した。入院は二月に及び、半期の休学することになり、卒業が一年延びるはめになってしまった。

退院し、リハビリに努め、再びボールを握れるようになったのは、事故から一年近くが経過した頃で、右手を離れるボールは、かつてのプラズマビームといわれたスピードの面影もなかった。それでも、ランニングは毎朝夕欠かさず、以前よりも工夫を凝らし、多くの守備と遠投の練習も

繰り返したが、一度失ったパワーは戻ることがなかった。

というのが、昼食時や、休日の居酒屋でジョッキを空けながら、ポツリポツリ話してくれた内容の大方である。

右腕でジョッキを持ち上げるときの坂本は、硬球を鷲掴みするという荒々しい仕草になり、「もう痛くも何ともないんだけどな」と目を落とし、「クソツと思つたよ」と、声を張り上げた。

「お陰でランニングの方は、かなりいけるようになった」苦笑いを浮かべ、やや自嘲気味に唇を舐めた。習性としてランニングだけは続けているうちに、あまり得意ではなかった長距離の方に、次の道を見付けたらしい。

「といっても、お呼びが掛かるなんてレベルのものじゃない。当然といえば当然のことさ。十四分台の半ばじゃね」十四分台の半ばというものがどの程度のものか分からない運動が不得手の私は、ただ頷くしかなかった。

坂本は、今も毎日四時に起き、出勤前の一時間ばかりをランニングにあてていると言った。

「中学時代から始め、入院時の絶対安静期間を除き、毎日欠かしたことはない。これをやらないと、一日が始まらない。もつとも、野球のために課してきたことだけだ。それが、勤め人になっても抜け切れていない」

言葉の端で、ハハ、と低く笑う声は乾いており、私自身のこととも重ね、胸に自虐的に落とし込めたものだった。

ところで、坂本の読書量には驚かされた。経済、法律、文学の類いから、漫画やタウン誌まで、実に幅広く、多く読んでいた。古典や、宗教书にまでも及んでいたから、いったいいつ眠るのか、と尋ねたものだ。

「入院中の無聊を紛らすため、三日に一冊という具合に決めた。中身を吟味するでもなく、手当たり次第に、ただ漫然と眺めているだけだから、驚くことはないよ。まあ、こいつがぼくの眠り薬代わりというところかな」

何ほどのことでもない、という顔である。

いかにもの体育会系というタイプとは異なるが、スポーツで鍛えてきたという風貌ではあったから、三日に一冊の本を読みこなしているというふうには見えなかった。

読書はもともと好んでいたらしいが、野球というメジャーなスポーツに関わりながら、文学や哲学に気持ちが向いて行くという奇妙な質でねえと、チームメイトからは、一郎ならぬ「三四郎」という渾名で呼ばれていたらしい。

フアンの子に囲まれると、彼女たちをどうやって捲くか、ということの方に気持を砕いていたというから、私から見れば、ずい分嫌味ともとれる贅沢な話だ。

とにかく、学生時代の前半は、神宮大会に出場するという華やかな時を過ごし、後半は失った自分を何とか取り戻そうとする、焦りの時を過ごしたということらしい。

私もたいして注目されるというほどではなかったが、短答式の模擬試験では上位に付け、自信を深めていた時期があった。しかし、二年間の法科大学院を経なければならぬという制度が、方向転換を余儀なくさせた。もつとも、予備試験というものにチャレンジするという方法がないではなかったのだが。

学習塾の講師のアルバイトをしながらの生活でもあったし、先に一浪をし、加えて失敗が許されないという家の事情が、いつか自分を臆病に導いてしまった。

司法試験コースで隣の席に座り、サークルの法曹研究会でも一緒だった知世は、五、六度私のアパートを訪ねて来たものの、いつの間にか話が噛み合わなくなってきた。

知世は今、最初の受験を控え、猛烈な追い込みに入っていると、同じ受験生である元の研究会の仲間から聞いたばかりである。彼はお前の選んだ方向が正解だったのかも知れない、と心細そうな声を出していた。

私には、チャレンジすることもないままドロップアウトしたことで、の気持ちのしこりが残っており、知世から浴びせられた「意気地なし」という別れ際の言葉が忘れられない。知世は、溢れ零れる涙を拭おうともせず、私の肩を揺すり、力を込め拳で打ったのだった。

「ぼくのテレビ貰ってくれませんか」

「近く開かれるハーフマラソンに出る予定です。タイムは度外視です」

日付は書かれていないものの、消印は坂本の死亡の日になっている。以前に書いた手紙を投函し、その後でウイスキーと一緒に、通常の数倍の睡眠薬を飲んだものらしい。

テレビの方はまだしも、近く開かれるハーフマラソンに出る予定という方は分からない。近く開かれるというマラソンがどの大会を指すのかも分からないが、一月後に市主催のシティマラソンがあり、その半月後に隣の町で開かれるリバーサイドマラソンがある。

一月後、若しくは一月半後のマラソンに出ようと考える者が、何で手紙を投函した日に睡眠薬を多量に飲んだりするのか。郵便の配達日も、どうして五日後に指定したのだろうか。

坂本のアパートを訪ねたのは、一度きりである。新入職員歓迎会の後、二軒回り、最後に二人きりになったので、寄ったのだった。

私も坂本もあまり飲めない口だったが、歓迎される側の新人というので、勧められる量の半分ぐらいいは飲まざるを得ず、最後には気分が悪くなってしまった。

坂本はトイレに何度か駆け込んで吐いたらしく、色黒の顔を青黒くしていた。時々道の中央によるけ出るほどに足

元がもつれていると見たので、送って行ったのだった。

「いかんいかん。酒の席も仕事のうちだ」

坂本は流し場で顔を洗い、何度も口を漱いだ。人事課は仕事上がりに決まって部屋で飲むのが習いであり、歓迎会前の三日間、十二時過ぎまで付き合わされたのだという。

「新人は、先輩より先には部屋を出れなくてね。コップなどの後片付けをして、すぐに二次会の場に顔を出さねばならない」

これが、毎日のことだと思つたと先が思いやられるよ、と言つた。

アパートの部屋は、六畳にキッチンという間取りで、六畳間にはストライプ柄のカバーを掛けた一人用ベッドがあった。ベッドの隣には、小さな机と椅子があり、机横の簡易な洋服箆筒もきちんと整理されていて、私の部屋に比べて随分落ち着いた空間だ、と感心したことを覚えている。

落ち着いた雰囲気を感じているのは、洋服箆筒の横の壁にすっぽり収まつた本棚だった。引き違いガラス戸の本棚には、はみ出しかけた本もない代わりに、少しの隙間もなく詰められ、ジャンル毎に整然と本が並べられていたことを、はつきり覚えている。

私の視線が本棚に向けられてるのを知つて、坂本は「似合わないだろうけどさ」と言つた。似合うも似合わないもないもので、「感心だね」と返し、「運動力学なんて

のは読まないの」と聞いた。太宰治や川端康成や最近の芥川賞受賞作家の作品が目立ち、坂本がやってきたという野球やランニングの本は目に付かなかつた。

「確かにね。野球もランニングの本も人並みには持つていたんだけど、ここに越して来る前、後輩が是非にと言つて、喜んで貰つてもらつたよ」

と言つたことを思い出した。

休日を選んだことと、坂本の葬式後五日が経つていたから、ひよつとしたらもうアパートの部屋は閉ざされていても知れないと思つて来た。

微かに見覚えのあるバス停の標識から一つ奥の路地に入つて行くと、アパートに突き当たる。玄関のチャイムを鳴らすと大家が顔を出し、「まだどこも触つていないんだよ」と言う。額に皺を寄せた五十代の主人の表情は、「こんなことだから、しばらく手が付けられない」と読めた。

鍵を開けてもらつと、一年前に見たのと変わらない部屋があつた。ストライプ柄のカバーのベッド。洋服ダンス。本棚、と足すものも引くものも殆どない情景だつた。

あの情景と異なっているのは、磨りガラスの窓から薄日が射し込み、ストライプ柄のカバーを明るく浮き上がらせていることと、唯一本棚の隣に真新しいテレビが並べて置かれてることだつた。ただ、本棚に平行に置かれて

ところから察すると、ベッドからも、机の椅子からも、多分テレビ画面は見えないのではないかと思われた。

「親御さんはえらい田舎に住んでね、退去手続きはしてもらったんだが、ことがことなのでねえ」

大家は、雲脂の浮いた頭を指で搔き回しながら、「荷物は後にすることにして、骨壺を一旦田舎に持ち帰って来ると言ったんだが、なかなか現れそうにない」と、どう始末を付けるかが決まらならしい苛立ちをぶつけてきた。

「テレビが何だつての」

物のことなど、自分にはよいとも悪いとも判断出来ないじゃないかと、余計不機嫌になる。不審死ということ、警察が度々出入りし、細かい調べをしたらしい。私は手紙を見せたのだが、「親御さんが現れたら連絡するよ」という一言で、それ以上口を挟むことは出来なかった。

大家から意外な早さで電話が入った。部屋を訪ねた翌日の午後だった。田舎から親御さんたちが来て、テレビ一台を残したまま、ベッドも本棚も、全て運び去ったという。

「こちらもこんなこと、早く始末してしまいたいからさ」電話の声を響めて言い、空き部屋募集のリストに載せるには、壁を塗り替え、床も畳も替える必要があるから、仕事が終わったらすぐにも来てほしいということだった。

アパートを訪ねると、大家が先に立って部屋の鍵を開け

た。どこも傷んでいないので、このままでも構わないんだが、自分の気が済まないんでねと部屋を見渡し、「最初から、塵一つないんだよ」と肩で息を吐く。

テレビには録画のための一式と台が付いており、他には余分なものはない。タクシーでも運べるんじゃない、と大家が言った。

「持ってっていいんですか」

「そう書いてあったら、手紙に。ああ、親御さんたちのことね。だったら問題ない」

急に愛想が良くなった。迷惑料として、規定の退去料にかなりの額を上乗せしてせしめたらしく、「まあ、こいつは気持ちの問題だからね」と鼻をひくつかせた。

タクシーまで呼んでくれたので、運転手に頼んでトランクにテレビ台を乗せ、テレビとDVDレコーダーは後部座席に積み込み、手で押さえ込んだ。

ワンメーターだったからか、運転手は急発進し、私のアパートの入口で急停車させた。座席のテレビが振動で大きく跳ねたが、無事だった。テレビと、トランクのテレビ台を降ろすと、タクシーはすぐに走り去った。

やれやれだ。私はテレビ一式を部屋の入口まで運び、ようやく人心地がついた。十九インチのそれは、私の持つ廉価品とは違い一流メーカーのものである。小一時間でつなぎ替え、スイッチを入れた。

画像は明るく明瞭であり、操作もシンプルで、なかなかのものだった。これまで使ってきた私のテレビは部屋の隅に移動させ、坂本のテレビの前に座ってみた。

チャンネルボタンも新品同様で、手垢がついた形跡もなく、良好だった。器具を配置し終えると同時に、携帯にメールが入った。まさか坂本が、と狼狽えるほどのタイムラグだったが、「知世、マジでいけるかもね」という、元の研究会仲間からのものだった。

まだ夕飯を済ませていなかったもので、部屋を出た。行きつけの飯屋で定食を頼もうとしていると、人事課の川西が入ってきた。隣の席が空いており、川西は横に座った。

「まだ退けではないんだ。これから、大仕事をしなくちゃならん」

川西は坂本の一年先輩であり、机を並べていた。

「たいへんですね。坂本がいなくなつて」

「あいつにも結構持たせていたから、そのツケが来た。当分、後任は見込めないし」

「かなり頑張っていましたからね」

「まあね。給与関係の基本データは通常一人で処理するんだ。そこが空席になると、時間が合わない。何てたって、給与支給のリミットに間に合わせねばならん。関係課の担当と連絡を取り合い、今大急ぎで資料のチェックをしている。

とにかく後三日しかない。徹夜だよ徹夜」

一番早く出来るうどん定食を頼み、半分ほどを流し込むと、出て行ってしまった。

坂本が他人の給与の算定ばかりで、仕事に乗り切れないと言っていたのは半年ほど前のことだ。他人の給与だから乗り切れないのではなく、決まり切ったことを間違いのないように捌いていく、ということが淋しいのだと言った。

反対に総務課は、決まりのないことばかりに時々々々対応しなければならず、その都度的確で、素早い判断を示すことを迫られた。それらが何であれ、規約や定めのないことが多く持ち上がるのは、組織が前向きに動いていく上では、好ましいことであるらしかった。

私は法学部出身の体質故か、規約があり、事例集が整えられているという、人事課の坂本の仕事の方がこの上なく羨ましく思えたのであるが。

「野球だって、ランニングだってルールに沿って動くんだが、必ずクリエイティブな面が試される。給与の算定は、大方が出来上がった公式に当てはめていくという仕事だろう。間違いは勿論許されないことはわかっているが、つい空しさを感じてしまうんだ。我が儘な言い分だろうけどね、こいつばかりは」

坂本が大きな希望を胸に、スポーツの世界で雄飛することを夢見ていた時期があったということは知っているし、

予想もしなかった方向転換というかたちで一般事務の道に至ったのだろう。どうであれ口惜しいだろうことは、自分にだってわからないではない。

私は焼き鯖定食を熱いまま口にしながら、いつもだと脂がのって美味い筈の鯖の味がしないのを、黙々と囓んだ。

部屋に戻ると、テレビを点けてみた。地デジ特有の間があり、画面が出た。最初点けたとき感じたのは画面がやけに明るいということだった。私の使っていたものが安売りの店で買ったということもあるが、それはそれで不自由なく用をなしていた。

メーカー品であるからなのか、画像の鮮明さばかりでなく、遠近感があり立体感まで感じさせる映像だった。チャンネルを変えてみた。どこも同じ映りで、十九インチの画面まで異様に大きく見えた。テレビには多くの機能がおり、説明書もぶ厚かった。読み通すのは大変そうなので、ところどころめくって見た。型は最新とまではいかないものの、私にとっては極上の部類だった。

選んだ局ではないものの、若い子が澄んだ声で歌っていた。アップになった子の唇が、いく分濡れて光っている。曲は哀調を帯びた南米のものらしく、背景には険しい山々の峰が流れ、山羊が高地の草を食んでいる。水は淡い鈍色の光を放ち、原色の布を纏った古老たちが思い思いに腰を

下ろしている。

曲は山々の頂や、山懷を包んで流れ、高原の風となって吹き抜けていく。

見るつもりはなかったのだが、引き込まれ二時間ほどの番組の全てに付き合ってしまった。どうやら、これまで私が興味を抱かなかった音楽専門チャンネルのようだった。

番組のタイトルは、「世界の音楽」と銘うっているが、音楽というジャンルであれば、かたちや内容を問わず何でも取り上げるものらしく、南米のそれも街角のストリートミュージシャンを取り上げたり、原住民の祭りや装束を取り上げたりと、自在に組まれているのだった。終わりには次週の予告が出て、いつの間にか次の鉄道の旅に番組が変わった。

スイッチを切ると、見慣れた自分の部屋にいるのに気付く、という奇妙な浮揚感に浸っているのを知らず覚えた。

坂本と私の関係を思った。同期採用で一年と少しの付き合いでしかない。二人とも総務部に所属していたが、顔を合わせることや、言葉を交わすことが、特別に多かった訳でもなく、意識し合っていた訳でもない。これから、三十五年を同期生という呼び名で過ごすのだろうかという関係でしかなかった。少なくとも、私にとっては。

人事課は職員の仕事も担当することになって

おり、職員の仕事の主催もしなければならなかった。

野球、ソフトボール、テニス、バドミントン、バレーボールなどの種目を、職場の課や支店対抗というかたちで、夏から秋にかけて、土日に行くことになっており、人事課の職員は分担して、どれかの球技種目の世話をしなければならなかった。野球、ソフトボールなど、多くのチームが参加する競技には総務課にも応援要員の協力が求められた。

坂本には野球が割り振られたそうであるが、野球だけは勘弁してほしいと課長に申し出、事情を知る課長の配慮を得て申し出は了承され、バレーボールの世話の方に回つたと聞いている。そのせいかどうか分からないが、野球では素人に過ぎない私に世話役が回ってきた。

「済まん」と、居酒屋でたまたま出会ったとき、隣の席に来て具合悪そうに言った。

野球は、炎天の下、八月の土日を三週使ってやるのだから、実際気重であった。

市の野球場と運動場の二面を借り、午前中に二試合、午後二試合という組み合わせで七回までの勝ち抜き試合を行い、三週目の午後に野球場で決勝を行った。

市への施設借り上げの手続きを始め、試合運営をスムーズに行うため、かなり詰めた打ち合わせや、世話担当者自身の準備運動が必要だった。平日の昼の休業時間に準備の運動をこなすため、二、三十分を確保し、昼食抜きで建物

裏の植え込みの影でキャッチボールをし、ストレッチをするという具合だった。

あるいは、仕事を幾分早く切り上げ、バツティングセンターに通い、アパート近くの公園をジョギングしたりして備えたのだった。

私自身、小学生の頃には、地域の野球大会に狩り出されることもあったが、バットを振ってもボールをなかなか捉えることが出来ず、守っては相手の凡フライがグラブに掠りもしなかった。だから、打席が回ってくるとすぐに代打を送られるのが常だった。

野球大会のとき、坂本がどこに居たものか知らない。野球場にも運動場にも、一度も姿を現さなかったことだけは確かである。人事課員の全員が参加する閉会式、懇親会にも姿を見せていない。

テレビを点けた。アパートの部屋に戻ると、テレビがあるのだということに気付く。自然にチャンネルボタンに手が伸びる、ということになった。

別に何を見ようという当てはない。順番にボタンを押していく。雨の風景になる。降り続けている。押し流すほどの雨量ではない。並木の桜の若葉を濡らし、歩道を光るほどに湿らせている。その下を人影が走る。

野球帽を深く被っている。若葉の滴を肩に受け、画面の

手前から走り出た若者は、歩道を画面奥へと向かう。数十本の並木の下を、斜めに降りかかる雨を潜り、瞬く間に走り去った。若者の後ろにも前にも、雨を潜って画面奥へ向かう若者たち。

「雨の風景」という画面上の小さな表記が、いつまでも消えない。

風景は変わって、増水した川を映す。川縁には歩道が延びているところを見ると、桜並木から続いている川なのだろう。増水した水はわずかに白濁し、瀬を分けて流れるときの水音が若者たちの呼吸音を消していく。

上流から流れてきた枝が瀬に掛かり、水流がわずかに渦巻き、流れ去る。流れの遠景には高いビルディングが立っている。

私は、何を考えるでもなく、画面に見入ってしまった。ひよつとして、坂本の録画でも見ているのかもしれない、と手元のボタンを確かめてみた。録画ではなかった。

「世界の風景」というチャンネルらしく、以前の「世界の音楽」チャンネルとの兄弟チャンネルらしかった。というのは、坂本がお好みチャンネルを設定したままのボタンを押しているのだとわかったのだったから。

殆どテレビは見ないと言っていたのに、好みの番組の設定はしたのだな、とようやく気付いた。録画は全て消去した形跡があるものの、好みのチャンネルの設定を解除する

ことまでは、思い及ばなかったとみえる。

坂本は、何で私にこのテレビを譲る気になったのだろうと考えた。

大家に尋ねてみたのだが、坂本はテレビの他の品物は誰にも渡さなかった筈だと聞いた。荷物を整理し、撤去する際父と母と兄がやって来たが、全て田舎に運ぶという手筈だということだったらしい。遺書は一通もなく、死に至る確かな原因も掴めなかったという。実際、近く行われるハーフマラソンに出るということ、伝えていたらしい。

警察も通常の量を越える睡眠薬を飲んだことが、自らの命を絶つためであったのかどうか、と逡巡したらしい。室内は荒らされておらず、内から施錠したことは疑いようがなく、解剖の結果も外傷などの異常が認められないため、鬱屈状態での睡眠剤の多量服用による過失死ではないか、という結論に至ったのだそうだ。

特に身边を整理するという考えも見えず、発見されたときにも争った形跡などなく、携帯にも不審なやり取りはみられず、目覚ましが四時にセットされていたという。

となれば、私への「テレビを貰ってくれませんか」という手紙は何を意味するのだろうか、と考えざるを得ない。

私に渡すためだから、坂本の生活や考えの臭いのするものである録画は消去し、初期状態のつもりにしたであろうことは知れる。しかし、私だってテレビを持つていること

は分かっていた筈であるし、本やCDなどは、その他の誰かに渡すという発想がなかったのだろうかと思わずにはいられない。

ともかく、何故テレビなのかということになる。それも、何故に私が選ばれたのかということがしつくりこない。

坂本とのやりとりの中で、肌の温もりを感じるということが、いったいいくつあっただろうかと考えた。総務部という大部屋に五十人ほどがいて、約半数ずつが総務課と人事課に所属していた。

課は係やグループに分かれており、会議担当の私と給与担当の坂本とは、相対する部屋の隅に座っており、共用の大型コピーやプリンタに歩み寄ったとき、一日に一、二度顔を会わせる程度で、言葉を掛け合うことも殆どなかったし、気持ちの壁に分け入ったという記憶もない。

夜の十二時近い時間に、足元をふらつかせながら飲み屋の通りを青黒い顔で、何かの怒りを溜め込んだとでもいへば表情の坂本が、私の方には目もくれず、歩き過ぎて行く場面に何度か出会った。

坂本がこんな遅くまで酔いを帯びたまままでいいのだろうか、と思うだけだったが、というのは、早朝に二十キロを走ることを日課にしていると聞いていたからだ。

「大丈夫か」と声を掛けたこともあったが、「そうに決ま

ってるだろう」と後ろも振り向かず、路地に姿を消すのが常だった。

「ぼくのテレビ貰ってくれませんか」という手紙を、何故私あてに書かねばならなかったのか、と考え始めると、いつも決まって暗礁に乗り上げてしまった。

ただ、私も坂本も、自らの意向に反し、方向転換をせざるを得なかったことへの拘りの念を隠し持ってこの職場に来た、ということだけは言えるのかもしれない。しかし、普段は真っ直ぐに仕事に向かおうとしていたし、私たちへの周囲の評価はまずまずのところであった筈だ。

ボタンを押すと、奇妙なものが映っていた。どこの国のものか知れないのだが、ほぼ直線に見える道路が、砂漠の中に伸びている。緑の一色もない赤銅色の風景の中に、奇妙な銀砂の道が果てもなく続いている。それを捉えるカメラがどこに位置するのか分からないのだが、五キロ、十キロ、三十キロと映していく。何の変化もない。

果たしてこの風景が地上のものであるのか、地上を越えたところのものであるのか。あるいは、地上を突き抜けた異界に踏み入っているのではないだろうかとさえ思った。音もない。揺れもない。際限があるのだとも思えない。

改めてボタンを見る。普通だとニュースだの、天気予報だの、バラエティーだのをやっている筈のボタンが、どう

いう設定がなされているのか、どれを押し試してみても「世界の音楽」や「雨の風景」であったり、ただ「道路」というチャンネルになっていた。

その他、「空間」というものや、「海の顔」といった人間の姿が殆どないか、一点景としてしかとらえられていないものばかりだった。世界の音楽にしても、演じる者の表情というより、音楽の源流そのものを映し、流れるに任せているのではないかと言ってもよかった。

坂本は、私に何を見せようというのだろうか。坂本自身が、この世から姿を消した理由は何なのか。その答えがどこかに隠されているのではないかと、目を凝らしながら画面を見詰めてみたが、私の心はどの一点にも止まらなかつた。あるいは、全ての点に止まっているのかもしれない、という言い方も出来たのだが。

坂本の読んでいた本の数々は、この画面と繋がるのだろうかとも考えた。文芸書が多かったと思うのだが、坂本は何を読み取ろうとしていたのだろう。職場の時間外の付き合いをこなしながら、三日に一冊というペースで、何をどこでどう読んでいたのだろう。

「ぼくのテレビ貰ってくれませんか」

私は、手紙の余白に何かのヒントが隠されているのかも知れない、と便箋の裏表に目を近付け、封筒を逆さまにして振って見たりした。便箋からは、変わらず微かな花の香

りが漂ってくる。

画面が少し変わった。

赤銅色の砂漠の風景が風になぶられ、銀砂がふわりと舞い上がった。銀砂は、宝石の粒を撒いたのかと思われるかたちに一際高く舞い上がり、煌めきながら、画面の遠くにゆっくりと散り落ちて行った。

しかし、続いてくる風の気配はない。月明かりか、夜明け前の光なのか判然としない光のもと、銀砂の散り落ちた辺りは、目映い萌黄色に一瞬目映く照り輝いた後、すぐに元の無音の砂原の風景に貼り付けられてしまった。(了)